

第十一章 駝鳥のボーア

一 元旦の旅順陥落

明治三十八年一月一日は、日本史においてまことに特殊の意義を有する日となった。旅順の要塞がついに陥落したからである。日露戦争のおこる前から、東洋のジブラルタル、難攻不落の無比の天嶮といわれ、かてて加えてロシアはクリミヤ戦争のセヴァストポリの要塞戦以来の経験をもつて、これを装備するに十年の月日を要した。されば連戦連勝の日本軍の猛攻をもつてするも、四回の総攻撃がごとく全滅に歸し、いまに鵬程万里のバルチック艦隊が来航して、日本の輸送路を遮断すれば、満洲全円に占めたる赫々たる戦果も、根を断たれた花となって、一空に帰せざるを得ないという危機に立ちいたり、この時ほど全国民が焦慮し、苦悩し、憂慎したことはなかった。しかもいつ降伏してくるとも、こちらでは、あてさえついていなかった時、突如として白旗をかかげて軍使が戦線に接近し来り、手わたした英文書翰に、まず *Capitulation* の字が目打ったので、当事者は思いがけなさにとび上った。元日の目でたさも、これ以上なのは類がなからう。

日本の喜びはロシアの絶望である。こちらの正月は、暦のちがいで、ロシアでは年末だ。十二月三十一日（大晦日）の日記にトルストイはこう書きこんでいる。

「旅順港の開城は私を悲しませた。私は苦しい。これは愛国心というものだ。自分はこの中に養い育てられて来たので、どうしてもこれから逃れられない。ちょうど個人本位のエゴイズムから、貴族本位のエゴイズムから、逃れられないと同じように、愛国心からも逃れることが出来ないのだ。これらすべてのエゴイズムが自分のなかに生きている。だが自分のなかには、神の掟の自覚がある。そしてこの自覚がこれらのエゴイズムを抑制している。それ故私はこれらのエゴイズムに奉仕しないでおられるのだ、そして徐々にこれらのエゴイズムは衰えていくのだ」(ピリュコフ著「大トルストイ伝」三巻 原久一郎訳)

旅順の陥落には、トルストイも落涙悲泣した。娘のアレクサンドラのかいた伝記にそう見える。吾々はトルストイを尊敬するだけ、それだけこの日記や、この記事をみて、彼もやっぱり人間で、血のかよっていない神仙でなかったことに、云い知らぬ親しみをおぼえる。

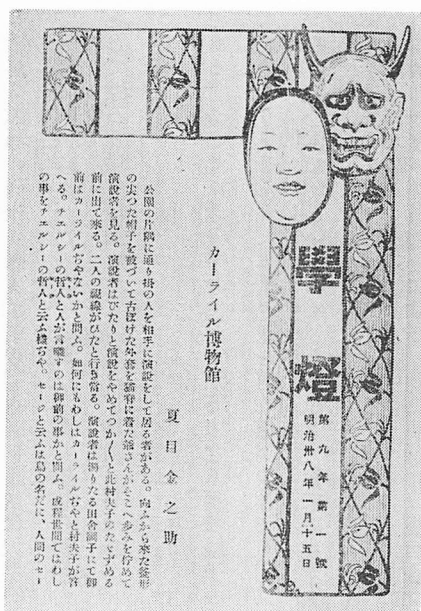
それはともあれ、今年も「学燈」はトルストイを心棒として、経過したというも過言でない。ことに第四号には、「トルストイの『復活』を訳するに就て」……魯庵生

という一文がある。これは雑誌で十頁にみたざる短篇であるが、明治時代日本文で草されたトルストイ文献中の逸品のひとつで、「復活」がコーニという最高裁判所長からきいた哀しき売笑婦の実話に基づき、迫害せられる非戦教徒ドゥホボールのカナダ移住のため、創作したいきさつなど、この篇によって、初めて仔細に知られたのである。のちに修訂して、訳本「復活」の付録としている。

二 漱石の登用

それより「学鑑」で目をみはるべきは、その新年号の巻頭に、夏目漱石の「カーライル博物館」と題する半ば物語り的な構想の一文が光輝をはなっていることである。それまでの漱石は俳人に名をつらねるといっても、名声は親友の子規にはもちろん、鳴雪、虚子、碧梧桐にとり、その他には夏目金之助として英文学者として学界の一隅にみとめられているに過ぎなかった。

それがこの正月にいたり、時を同じうしてホトトギスに「吾輩は猫である」を、帝国文学に「倫敦塔」を、学鑑



夏目漱石著「カーライル博物館」

に「カーライル博物館」を同時に発表し、その健筆に一世を瞠目させて、ここに俳人のただの漱石にあらず、文学士の夏目金之助にあらず、作家夏目漱石が誕生した。世評は「猫」もっとも高く、「倫敦塔」これに雁行し、「カーライル博物館」は物がじみなだけに江湖を湧き立たせるという種類の読み物には遠いが、漱石の及び難からざる所以は、具眼者のひとしくみとめた所であり、彼の文学的名声をつくるに十分の役割を果たした。

しかも漱石の従来の発表機関の、ホトトギスは大学時代からの友人子規の旧縁により、哲学雑誌や帝国文学は帝国大学の関係によったので、いわば江湖の雑誌の初舞台をふんだのは「学鑑」である。けだし内田魯庵は江戸ッ児として漱石と意気相通するものあり、親密の交はなかったが、物をたのめば応諾してくれる仲にあったので、漱石の文壇出発の一機縁をつくるの功績を魯庵は立てた。けだし魯庵が、漱石の才能を見ぬくだけの具眼者だったためである。ついでに云っておくが、漱石未亡人夏目鏡子の談話に「雑誌にのせた原稿料などの記憶はほとんど確かなものはありませんが、カーライル博物館が全体で八円だったのをおぼえております」とある。

その「全体で」というのは、あの篇は、巻末に「カーライルの旧居に所蔵するカーライル遺書目録は次号に掲ぐべし」とあり、その通り翌二月号には

「カーライル博物館(原文ママ)にする 遺書目録 夏目金之助」

というのがのとっており、書きだしに

「カーライルの旧居に今でも保存しているカーライルの遺書の目録を中には面白く思う人もあるだろうと思つて書き写して次に出す」

とあり、終末に

「クロンウェル及ビフレデリックヲ著ハス為メニ用イタル参考ノ諸書ハハーバード大学ノ所有トナル」と付記せられている。しかし書目だけで菊判十八頁二段組の多数にのぼるのだから、これを収めた短篇集「濠虚集」以来削除せられて、どの全集でも顧みられず、最新岩波版の後註にさえその事が言及されていない。

三 京都支店開設

漱石の代表作は「猫」であるが、その中に次のような問答がある。

「狩野法眼元信の幅を六百円ただし月賦十円はらいこみの事で売りわたす」

「タイムスの百科全書見たようですね」

「タイムスはたしかだが、僕のはすこぶる不たしかだよ……」

この構想のよって来る背景には、もちろん丸善のこの年最も目ぬきの歴史がからんでいる。すなわちタイムスはこの年をもって、ブリタニカの新版第十版の予約募集を開始した。これで三度目である。ただ今までと違う点は、丸善を特約代理店にするに当っては、京都と長崎にあらたに出張所をもうけて、販売網を拡張することを要求してきたのである。これは京都はその集書館が明治五年にできて明治最古の近代図書館で、新築拡張の最中であり、府内一ばんに歴史的に読書に伝統のふかく残っていること。前年から京都大学が設立され、いまや東京とならんで只ふたつの帝国大学として重きをなし、教授学生ともに書物の需要があるべきこと。そして長崎は幕府以来の唯一の西洋文明吸入口として、そのころもまだ外国人の目には、文化的都市として映っていたのであろう。日露戦争の大勝終結直後で、わが国民全体に文化的機運の勃興してきたことは、元より背景として考慮に入れねばならぬ。中村日記をみると左の記事が散見する。

十月六日 タイムス社へ代理店引受ケニ付テハ異議ナク京都長崎へ出張所ヲ設ケルニ付テハ御協議ノ上設ケ

度答フ

九月五日、北米ボーツマスで日露講和談判が締結しているので、タイムス社からの提案はその後まもなくであることが分る。

十月七日 タイムス社依頼ノ件ニ付キ支店長ノ意見ヲ糺シタル処本支店ニ於テ引受ケヲ為ス上ハ京都出張所ハ無論当方ニテ引受ケ度意見ヲ有スト

十一月三日 金沢末吉氏来訪セリ。京都出張所ニツイテハタイムス社ヨリ当方へ依頼シ来レリトすなわち京都への拡張は、丸善の発意でなく、タイムス社の提案依頼であつたことがわかる。

十一月八日 タイムス社ヨリ京都出張所ハ同地京華社ノ二階ニ設クルコトニ定メタルコトニ申越セリ 右ハ不都合ノ申越ナルヲ以テ直ニ異議ノ申込ミ為シ且ツ晚来主任會議ヲ開キ同出張所ハ兼テ当方へ依頼アリタルヲ以テ既ニ当方ニ於テ撰定シアレハ京華社ハ取消スベク申込ムコトニ決シ直ニ電話ヲ以テ出張所撰定ノ事ヲ申送リタリ

タイムス社の専断の所置に反対したのは、彼のえらんだ家屋が實際に不適當であつたのかも知れないし、一寸の虫も五分の魂の抵抗であつたかも知れない。それからはタイムス社が悉く丸善の言を容れ、仕事が順調にはこんなことは、次の記事でわかる。

十一月九日 京都ニ於テ斎藤支店長ヨリ出張所適當ノ処寺町通式部町ニ在ル旨電話ニテ申越シタルヲ以テ直ニタイムス社ニ其旨ヲ通シ且ツマッキー支配人ニ面会シ京華社ノ出張所ヲ取消スコトノ承諾ヲ得タルヨリ諸事

打合せノ為午後六時新橋発汽車ニテ荒川氏ヲ支店ヘ向ケ出張セシメタリ

十一月十日 午前主任会ヲ開キ京都出張所ノ件ニ付協議ヲ開キ且ツ同所出張員ニハ先ツ田中二郎トスル事ニ決定ス

十一月十一日 田中二郎ニ京都出張所出張ヲ命シ夜来八洲亭ニ於テ同氏ノ為ニ送別会ヲ開ク

十一月十二日 田中二郎本日午後六時新橋発汽車ニテ京都出張所ヘ向ケ出発ス

十一月十四日 斎藤支店長ヘ大英百科全書予約販売広告来十六日より発行新聞ニ広告スルコトヲ通知ス

十一月十五日 荒川氏昨夜帰京ノ由ニテ本日ヨリ出勤セリ京都出張所ハ昨十四日より準備粗成ル支店ヨリハ

去十三日敬太郎（註 片桐）出張セリト

十一月十六日 大英百科全書予約広告ハ予定ノ如ク本日ヨリ諸新聞ニ広告セリ

今日丸善の支店は全国にあるもの十七店。思うにその中で、東京について花々しい歴史をもつのは京都支店であろう。西洋詩の鑑賞者として本国人にも劣らぬ上田敏、あるいは湯川秀樹、朝永振一郎の両ノーベル賞科学者を初め、京都大学、同志社、奈良女高師などの諸教授や学生が出入りしたからである。その京都支店の出発はじつにタイムスの依頼で、ブリタニカを売りひろめるために設けられた微々たる京都出張所であったのだ。それが昭和になつては梶井基次郎の短篇「檸檬」に描かれているイメージの如く、つまり千年の古都の中に、ハイカラのフォークスをつくる丸善に発展したのである。

十一月廿五日 夜来会議ヲ開キ兼テタイムス社ヨリ申込アリタル長崎出張所設置ノ件ニ付討議シタル処タイ

ムス社ニ於テ強テ出張所ヲ置クト云フナレハ京都同様当方ニテ引受クル事ニ決定セリ

京都出張所はすすんでも引き受けたかった丸善が、長崎へもというところ、会議に手間をとったのは、両市のもつ實力から云って当然だったであろう。

四 日本人の海外信用

タイムス社と丸善で大々的に第三回目のブリタニカ月賦販売を開始した矢さきに、これに三斗の冷水をぶっかけるような寄書がタイムスにのったのである。筆者は久しく日本に滞在した聖公会の監督ウイリヤム・オードリイで、かねて高德をもって聞えた人だけに、その齒に衣きせぬというより、若干惡意にみちた言説は、ひどく日本を衝撃した。

すなわちそれは、日露戦争にあらわれた日本人の愛国心、勇氣、節制力は驚歎に値するも、これに相應すべき私徳における高尚、廉潔、正直にはすこぶる欠ける。わずかに日本政府と、大銀行と、少数の商会とは信用できるが、一般的にいつて商業的信用は地をはらい、現に日本人が自国同胞の手形より、イギリス人の口約の方を重しとする。風俗の頹廢にいたっては云うに忍びず、外国旅行者の目には、こんな道徳のみだれた社会が、よくいつまでもつづくだろうかと疑わずにはおられぬ、とに角日本人という奴は、個人性なく、自尊心なき猫かぶりで、海外にあっては品行方正の紳士面をしていても、自国に帰ってなお私行のきれいな者は稀だ。イギリス婦人の日本人との結婚は極力とめなくてはならない——云々。

丸善が果して、このオードロイ僧正のいう「信用できる商社」に数えられていたか、どうかはわからない。しかしタイムス社にとっては丸善は、彼等の期待以上に義務を遂行し、その目に日本人の価値を大いに上げた。というのは、タイムスの出版部長みずから自紙に投書し、事実を裏づけとして、僧正を反撃したのである。それは十月七日の紙上にのり、ほぼ、その言葉のとおりに取次ぐと、こうである。

「かくの如き誹謗に無言でいるのは、タイムス社として徳に欠けることである。タイムスは過去八年のあいだ世界各国に、二年ないし四年の月賦組織をもって、エンサイクロペディア・ブリタニカを発売した。これが代価の支払に、その期日をまゐると否とは最もよく、各国民の徳義を表明するものである。……いま日本での成績を云うに、日本国内における申込者の九割五分までは日本人で、欧米人ではない。イギリスでは期日までに代価をはらいこむ予約者は半数に達しないが、日本では期日におくれるものは一%もない。半数以上は、一日でも期日におくれることを恐れるもののように、さきに払いこんでくれるので、催促の集金費用もイギリスの半分にだに達しない。日本人はまるで、すべての負債を、名誉にかかわるものとなし、始終これを気にしているものようである。イギリスでは商業上の取引きにこんな感情をもっている者はない」

又いわく――

「タイムスが初めて月賦組織をもって、ブリタニカを日本で売りひろめる計画を話すと、英米人でそれはいいと賛成した者はただ一人で、他の者はみな、これが必要とする英米人はすでにイギリス本国から取りよせている。日本人にこの大辞書の購買者なんて無いであろうし、たとえあっても、最後まで支払を完了すまい。別

な者は又いわく、日本人も買うことは買うだろう。しかし一たんその全部の品物を受取ったら、あとを払いこむのは阿呆らしいとしてやめるであらうと。事實はまったくこれに反し、日本人のブリタニカ注文者はドイツとフランスの申込者をあわせた数の五倍、ロシアの申込者の五十倍に達し、代金収入に関してはイギリスにおけるよりも好成績である」

これは恐らく大体その通りで、溢美の言でも、過褒でもあるまい。明治時代のブリタニカでも申しこもうという者は、やっぱりサムライであつたのだ。その事を海外に実証したのは、丸善の功である。いまは物うつり、世かわり、初めから詐欺の目的で、申込金とともに全部の品物がはこびこまれると翌日は売払い、神田にならぶ古書肆の店頭は、ブリタニカで氾濫している。その発行がアメリカに移ってから内容もガタ落ちしたが、これを購う日本読書社会の道徳もまた低劣をきわめたものと云わねばならぬ。オードリー僧正の投書も、日露戦争中の日本購読書界のこととせず、五十余年後の今日のこととすれば、まことに適切で、つまり予言的權威をもつ。

五 ウエブスター字典と福沢諭吉

日露戦争をはさんで、前後にわたるほぼ十年の丸善の業績は、月賦予約の販売を中心に廻転したと云ってよく、一目のもとに表示すれば次のようになる。

書	名	冊数	予約開始期	予約締切期	予約部数
エンサイクロペディア・ブリタニカ	第九版	二五	明治三五年一月	明治三六年二月二五日	一、一二五

センチュリイ大字典	一〇	同	三六年三月	同	三六年七月三日	四五九
エンサイクロペディア・ブリタニカ 第九版補遺	一一	同	三六年一〇月			三〇〇
マイエル大百科全書 第六版	二〇	同	三七年三月			六〇〇
エンサイクロペディア・ブリタニカ 第十版	三五	同	三八年一月	同	三九年二月二八日	四、二〇〇
センチュリイ大字典	一〇	同	三九年四月	同	三九年七月一四日	二、三〇〇
ネルソン百科全書	一〇	同	四〇年三月一日	同	四〇年七月二五日	四、五〇〇
マイエル小百科全書 第七版	六	同	四〇年七月			五〇〇
英訳ケンブリッ日本歴史覆刻本	三	同	四〇年一月一〇日			二六〇
歴史家の歴史	二五	同	四一年一月	同	四二年四月一日	一、六〇〇
センチュリイ大字典補遺	二	同	四三年二月			一、六〇〇
ネルソン百科全書 一九一一年版	二五	同	四四年六月	同	四五年七月一〇日	七、〇〇〇

この表を見て、ブリタニカが、わずか三年の間に、年一回ずつの予約募集をして総計五千六百余の読者を獲得している。当時は小説でも初版五百が標準であったというのに、この高価でしかも読める者も少ない外国語の書物が、この驚異的な成績を示すとは、どういう事だろう。

人口が多いということ、教育熱心で普通教育の就学率がドイツについて世界二位だということが、一応の理由にはなろうが、英文百科全書は小学卒業生に読めるものではない。大学は東京と京都と帝国大学が二つ、慶応、早稲田、明治、中央など私立を加えても十を出でず、高等学校も十に充たない。図書館もこの購買力のあるのは全国で十を出まい。博士の数もとびぬけて多い医学をふくめて二百人を出まいし、旧大名華族をみんな数えるとしても三

百に足らぬ。それらの中から五百の読者を得ることは、なかなか困難だろうと思えるのに、その十倍を突破する。不思議はそれのみに留まらない。ブリタニカがあれば、センチュリーがどんなに優秀簡便だとしても、これを併備するのは、図書館でもないかぎり、個人では、いわゆる屋上に屋を架する嫌いがあるのに、これも相当の購置者を見出している。

だいたいに於てこの期間、ことに明治三十八年は字書、事典、年鑑の活潑にうごいた年ともいうべく、「学鑑」にのつたものを左に表示しよう。

スタンダード大字典 (一冊)

二五・〇〇^円

ニュー・インタナショナル・エンサイクロペディア (十七卷)

布装 一三・五〇
革装 一六・〇〇

農家用農業大辞典 (一卷)

七・〇〇

西蔵・英語辞典 (一卷)

二八・七五

チエンバー二十世紀英字書 (一卷)

一・五〇

ウエブスター・インタナショナル・ディクショナリー (一卷)

一六・五〇

ピラス・シリリング・サイクロペディア (一卷)

・六〇

フース・フリー (一九〇五) (一卷)

四・五〇

政治家年鑑 (一九〇四)

特価 三・五〇

ホイテエーカー年鑑 (一九〇五)

・六〇

ゴータ年鑑（一九〇五） 仏文

五・〇〇

同 （ ） 独文

五・〇〇

技師懷中便覧（一九〇五）

・七〇

デエリイ・メル年鑑（ ）

・九〇

写真年鑑（一九〇五）

一・五〇

華英類語（一冊）

四・〇〇

カッセル・キャビネット・サイクロペディア（一九〇四）

七・五〇

ジャバン・イヤール・ブック

二・〇〇

ザ・フィリップピンアイランド（全五五冊既刊二七冊）（一四九三・一八九八） 売価 五〇〇・〇〇

この中の若干は新刊だが、大部分はすでに早くから日本に入っているものもあり、何回か「学鑑」に広告の出ているものもある。しかしそのころは記者がその価値を弁識しなかったためか、五号の並活字で一般図書なみに並列して広告した程度であったのを、今度のは改訂新版の出た加減もあるが、とくに取りあげて、二頁、一頁、半頁の特大広告とし、しかも連月くりかえして読者の注意をひいているのは、読書界にそれだけの要求があったからであろう。

その広告文は、よんでみると、悉く内田魯庵の筆になっているので、字々飛奔し、句々鳴動し、われらはその中から全く埋没した意外の歴史的事実を発見することができる。

この中で、日本ばかりでなく全世界にわたって最も広く活用されたのはウェブスターの大字典であろう。英学者の増田藤之助教授は生涯に七冊、この辞典をつかいつぶしたと伝えられているし、現在たとえばジャパン・タイムス社の編集でものぞいてみると、室のまん中にそなえられているウェブスターが内外記者によって入れかわり、立ちかわり、絶え間なくひかれて、右端は紙がぼろぼろに手ずれて、まさに摩滅に近いのを発見するだろう。

このウェブスター字典を日本に入れた最初の人が三田聖者といわれた福沢先生（諭吉）であったことは今さら説くに及ばないほど有名な話である。一八六〇年の万延元年、咸臨丸で太平洋初横断したときの話で、「福翁自伝」に

「このとき私と通弁の中浜万次郎という人と兩人がウェブスターの字引を一冊づつ買ってきた。これが日本にウェブスターという字引の輸入の第一番」

とある。これは大字典だったか、あるいは何年に出たどれかの改訂版だったか、今日では実物が失われて確認できぬ。しかしその年四月四日の San Francisco Herald 紙に、咸臨丸の乗組員が街中をぶらついた記事があり、

One of them astonished a stationer not a little by asking, in excellent English, for a copy of Webster's Dictionary, the value of which he appeared quite familiar.

がその全文である。これほど英語がよく話せたのは福沢でなく、漂流による海外生活十一年の経験者の中浜の方であろう。いずれにしても、アメリカの西のはての新開港のサンフランシスコでウェブスター字書の有無や定価を本屋によって聞いたのは、今日、日本の西端の種子島の本屋によって寄港のベトナム人が「広辞苑」か諸橋轍次博士

の「漢和大辞典」を買ったほど、稀有のこととして驚かれたのだ。

「学燈」第九年第九号の二頁見ひらき広告には、英米諸名家および刊行物の批評を原文のまままで併載し、その両端に、

「死語を集めたる康熙字典は無きも可なり第二の母語たる有用の活語を集めたるウェブスター大字典は家々必ず一部を備えざるべからず」

「メリヤム会社は福沢先生の讃辞をあげて世界に広告したり。日本国民のウェブスター大字典を驚歎するは豈独り福沢先生のみならんや」

と云っている。およそ少しでも漢籍をよむ者で、康熙字典は必備とされたが、それとくらべて鼎の軽重を問い、さらに福沢論吉からウェブスターに讃辞を寄せているのに言及するところ、まさに魯庵ならでは能わぬ巧みな宣伝である。それはとに角として、日本にウェブスターを初輸入した福沢論吉が、その讃辞をかけたなどというのは、今日ではあたりまえになっているそうした宣伝広告の始まりで、恐らく福沢論吉全集にも拾われておらぬ貴重の逸文である。こんな発見をさせてくれる商社の機関誌というものは、他には無い。

六 クリスマス・カード

日露戦争とともに急激の発達をみせたのは絵葉書の使用であることは前にいった。戦地で日本の芸者や風景の写真や絵が、戦塵にすさんだ兵士の慰安となったこと、多大だったからである。それが戦争終結と共に、明治三十八

年末にはクリスマス・カードの売り出しが大々的に広告された。

Just unpacked A CHOICE SELECTION OF XMAS & NEW YEAR CARDS from the Best London Firms, Beautiful Hanging Calendars, Also Children's Toy Books, etc. etc., The price ranging from 5 sen to 4 yen. Suitable for Season Greeting. Inspection Invited.

(荷を開いたばかり、よりどり見どりのクリスマスカードと新年絵葉書。ロンドン最高商会製作。美しい掛け曆。子供の絵本等々々。定価五銭から四円まで。時候挨拶に好適。縦覧歓迎)

とにぎやかな呼びかけである。学生たちには、この広告で XMAS をクリスマスと読むことを初めて知った者が多い。ひいては手紙の末文に XXXXX とならべてあるのは、キス、キス、キス、キスの意味であることまで追及した者もあろう。今や、クリスマスに馬鹿さわぎをすることは日本が世界一になったが、この俑をつくるには、丸善も若干の責任があるかも知れぬ。

丸善の洋品部は、もっぱら紳士用品を取りあつかう。明治三十三年（一九〇〇）ごろの菱屋洋物店の一枚ちらしの広告をみると、約四十点の品物のならんでいる中に、婦人用肩掛、婦人用シャツ、婦人用手暖（マフ）の三点がのっているから、全く無視したのではなさそうだが、多分あまりそれは繁昌もしなかったと見え、数年間、姿を消していた、日露戦争ごろの取引状況は、つぎの通りである。

直接取引

英国 エガー 洋品服装品毛織物（明治三十七、八年より）

代理店、仲買を通して――

英国　ゼレミヤライオン　雑貨（不明）

〃　ビショップ・レーシー　麻、ハンカチ、ワイシャツ他（明治三十七、八年より）

〃　バッターズビー　帽子（不明）

〃　トレス　帽子

代理店を経由するもの

英国　ウィルモット　革製品・ガラス（明治三十七、八年頃より）

〃　アトキンソン　化粧品

〃　ビノリヤ　〃

〃　ペヤース　〃

〃　サニトル　〃

〃　トーマス・クリスチー　〃

〃　アルバート　〃

〃　ヤードレ　革製品・ガラス（明治四十年頃より）

それが明治三十八年の年末になると、特に「貴婦人令嬢の御来観を待つ」と呼びかけたものだから、かつては角帽の制服、あるいは袴に朴齒下駄の学生が幅をきかした門戸を、紅紫繽紛として女性たちもくぐるようになった。

最新流行のポー

羽根襟掛
白金五圓五拾銭
茶白、鼠白、黒白、その他

東京市日本橋區通二丁目
丸善株式會社
洋物店

最新刊圖書目錄呈

○新書
○雜誌
○洋書
○地圖
○文具
○玩具
○樂器
○美術
○科學
○文學
○歷史
○地理
○生物
○醫學
○法律
○政治
○經濟
○社會
○教育
○宗教
○藝術
○體育
○音樂
○戲劇
○電影
○攝影
○印刷
○建築
○園藝
○農業
○工業
○商業
○交通
○通信
○電氣
○機械
○化學
○物理
○天文
○地質
○氣象
○海洋
○礦山
○森林
○動物
○植物
○人類
○社會
○政治
○經濟
○法律
○醫學
○教育
○藝術
○體育
○音樂
○戲劇
○電影
○攝影
○印刷
○建築
○園藝
○農業
○工業
○商業
○交通
○通信
○電氣
○機械
○化學
○物理
○天文
○地質
○氣象
○海洋
○礦山
○森林
○動物
○植物
○人類

ポーの廣告

したがって流行のさがけは必ずしも三越のみから、うまれたとは限らない。たとえば「学鐙」の年末号の広告に半頁をとり、当時流行の二〇三高地という髪にゆった女の絵をのせて「最新流行のポー」という広告が出ている。「羽根襟掛」という訳がつき、色は白、黒、鼠、黒白、鼠白その他各種類があり、定価は五円五十銭から四十八円までで、相当に高価なものである。

この号における広告文面はそれだけだが、翌明治三十九年新年号の広告には

「市中をお歩きになって一番目に立つは御婦人方の駄鳥（駝鳥）ポ

アと毛皮スカーフでございます。これが唯今の一番の流行でございます。これは丸善洋物店が最も早くさがけしたのでございます」

と云って、書物以外にも流行に先鞭をつけたのを、いささか誇るものようだ。それも必ずしも不当ではない。それから二年たって朝日新聞に連載せられた夏目漱石の「三四郎」という小説のなかに、空にうかぶ白い雲をみて、次のような会話がかわされる。

「駄鳥の襟卷に似ているでしやう」

三四郎はポーという言葉を知らなかった。それで知らないと言った。美弥子はまた「まあ」と云ったが、

すぐていねいにボーアを説明してくれた。

じつは大多数の読者は、三四郎と同じく、この時まだボーアの何物たるを知らず、この漱石の記述によって、はあ、あれをボーアというのかと、ようやくさったのである。漱石もおそらく、「学鐙」の広告をみるまで、ボーアについては知らなかったかも知れない。いずれにしても、これをよんで、苦笑するか、あるいはちょっと得意の気もちになったのは、この広告をかいた魯庵その人であつたろう。

さらに二年をへて上田敏の唯一の小説「うづまき」が国民新聞に連載せられた。これは一面において漱石の「三四郎」を参照した跡があり、また永井荷風の「新帰朝者の夢」の影響もあるが、自伝的要素が多い。そしてこの中にも、

「その陰に暖手套や毛頸巻がちらついて、後から男連もどやどや近づいた」

の句をはじめ毛頸巻という文字が数か所に出てきて、ようやく日本語のなかに或るおちつきを見せかけている。

「学鐙」のこの年（明治三十八年）十二月は「光栄ある歳暮」（偶来生）の一文をかかげ、次の如き一節がある。

「戦争は光栄ある勝利をもって終れり、凱旋將軍は日に帰来して国民の歓呼を受け、紅燈彩旗やイルミネーションや凱旋門や相つらなつて日本を一貫し、日本全国をあげて満艦飾を施したる斯くの如き歳暮はいまだ曾つてあらざるなり」

そして戦争が及ぼした各種の影響を大観した中に、海外知識の普及を左のように強調している。

「この戦争によって国民の海外知識および海外につきてのインテレストは著しく進みたり。電車を知らざる僻

村の権兵衛八兵衛すら、はなはだ発音にくき露国の地名人名をそらんじたり。露国の方角を知りたり。浦塩のはなはだ近くして、ペテルブルグの甚だ遠きを知りたり。シベリヤ鉄道の東清鉄道に連絡して、大連より直ちにペテルブルグの遠きまで到達し得るを知りたり、ウィットテという大人物の名を知りたり。ウラーと万歳と等しきを知りたり。これらみな甚だ些々たるが如けれども、更に大いなる外国知識を得べき楷梯をなすに足るものなり」

そうだ。丸善の仕事をささえる最大底辺が急速に拡大して、その力がつよくなったのだ。